

漢文 唐詩〈四〉

春夜喜雨

杜甫



講師
渡辺恭子

理解を深めるために

■学習のねらい■

「唐詩」の最終回。杜甫の作品「春夜雨を喜ぶ」を取り上げます。「春夜雨を喜ぶ」は、今まで学習した詩の中で、最も長い八句の詩です。語句の意味や書かれた背景を学びながら、詩の理解を深めましょう。また、「対句」という初めて登場する技法についても学習します。

* * *

「春夜喜雨」の内容を理解する

題名の「春夜雨を喜ぶ」は、「春の夜に降りはじめた、恵みの雨を喜ぶ」という意味です。この詩は、杜甫が、都の長安から遠く離れた成都という都市で、平穩に暮らしていた五十歳ごろに作られたものです。

前半の四句では、「ちょうど良い時機を見定めたように静かに雨が降り、それが、万物を生育させている」と、春雨のやわらかく降る様子をうたい、雨を歓迎する気持ちを述べています。

後半の四句では、「黒一色に包まれた夜の闇の中で、唯一明るく光るいさり火。そのいさり火の一点の赤い光が、翌朝の雨に濡れた紅色の花につながり、この紅色の花が成都の町いっぱいには鮮やかに咲いていることだろう」と想像し、杜甫の気持ちは喜びに満ちあふれるのです。

ここに出てくる重要語句の意味を理解しましょう。

■語句の意味

- 好雨……………ちょうど良い時機に降る雨。恵みの雨
- 時節を知り……………(降るべき) 時節を心得ている
- 乃ち……………ここでは、強調
- 発生せしむ……………万物を生育させる
- 風に随ひて……………(雨は) 風に吹かれながら
- 潜かに夜に入り……………夜の闇に紛れ込むように、ひそやかに降っている
- 物……………すべての物
- 声……………雨の降る音
- 野径……………野のこみち

- 江船……………川に浮かぶ船
- 火……………いさり火
- 独り……………「ただくだけ」（限定の表現）
- 錦官城……………蜀の都「成都」の別名。蜀の名産である錦をつかさどる

役所がおかれていたことから「錦官城」と呼ばれた。この詩を作ったときに、杜甫が住んでいたところ。

作者「杜甫」と「春夜喜雨」の作られた背景について

杜甫は、李白と並んで「唐」を代表する大詩人です。幼いころから読書好きの努力家で、より良い社会を作りたいと願っていました。官吏登用試験（科挙）には合格できませんでしたが、詩の上手さが買われて、皇帝からちよつとした役職をもらったのです。ところが、「安祿山の乱」が起こり、杜甫は反乱軍に捕らえられ都（長安）に軟禁されてしまいます。その後すきを見て脱出。再び皇帝に仕えます。しかし、正義感が強すぎて皇帝から嫌われ、再び失脚。家族を連れて流浪の旅に出ます。

その後、数え年四十九歳のころに、成都に居を構え、自然に恵まれた環境の中で、家族と暮らします。杜甫の人生に初めて訪れた、静かで安定した生活でした。生活の安定に伴って、杜甫の心境も落ち着き、それが詩作にも反映していきます。「春夜雨を喜ぶ」も、このときに作られた作品です。しかし、ここでの生活も長くは続かず、船旅の途中で病にかかり、五十九歳で亡くなったといわれています。

「唐詩（近体詩）のきまり」について

「春夜雨を喜ぶ」も近体詩です。「詩の形式」「韻」「対句」について、学習しましょう。

- 詩の形式……………「五言律詩」（杜甫は「律詩」が得意）
- 韻……………「生・声・明・城」
- 対句……………「律詩」では、第三句と第四句、第五句と第六句を「対句」にするきまりになっています。「対句」とは、二つの句を対応させて表現する技法です。「対句」となる二つの句は、原則として、
 - ①内容上関係があつて、
 - ②文法的にも構造が同じで、
 - ③字数も同じ、
 でなければなりません。



唐詩〈四〉

講師
渡辺 恭子

春夜喜雨

杜甫

好雨知時節	當春乃發生
隨風潛入夜	潤物細無聲
野徑雲俱黑	江船火獨明
曉看紅濕處	花重錦官城

『杜工部集』

〔現代語訳〕

- ① 植物の成長にとつて、ちょうど良い時期を見定めたように雨が降り、
- ② 春という時をはずさずに、万物を生育させる。
- ③ (雨は、) 風に吹かれながら、夜の闇に紛れ込むように、ひそやかに降っている。
- ④ 細やかで音もなく降り注ぎながら、すべての物に潤いを与えている。
- ⑤ 野の小みちも雨雲も、みんな黒く(闇に沈む中で、)
- ⑥ ただ川に浮かぶ船の(いさり)火だけが、明るく光っている。
- ⑦ 夜が明けて、紅色がしつとりと潤っている辺りを(もしも)見たならば、
- ⑧ (そこには雨にしつとり濡れた)花々が、錦官城(のあちらこちら)で、重たげに(咲いている)であろう。